

## 米の供出制度

資料提供・文 林宏光



▲写真1・上八幡 昭40頃

米の供出は1942年（昭和17年）に政府の食糧管理制度の下で行われました。戦時中の非常事態に、農家から米、麦、雑穀など主要の食糧を買い上げ、国民に公平に配給しました。供出は各地区の農協倉庫（写真1、上八幡・昭40頃）で行われ、米俵、米袋を

大八車やリヤカー、軽三輪車で倉庫まで運び検査を受けました。

農林省の検査技官また農協担当者が立ち会い、重量、等級などの検査をしました。2人の男性が天秤棒の両端を担ぎ真ん中にチギ（写真3）を直角方向に吊して、俵、米袋を引っ掛けて持ち上げ、もう1人は分銅（写真2）を動かして目盛りを読み記帳されました。

チギ（棹秤・写真3）は長さ126cmで分銅の定錘は秤量八拾貳（写真2）は重さ約4kgです。現在のバネ秤で50kg分銅の重さは500gです。

また、米さし（写真4）の長さは50.5cmで、尖った先を俵に刺し、サンプル米を抜いて検査し、等級（写真5）が決まり米袋に等級印を押印されました。

幕末の池田御上米は上八幡の八幡土場（川港）の杭瀬川から桑名へ舟で江戸方面に送ったと言われています。

1955年（昭和30年）産米から供出制度から予約売渡制度が実施されて、供出制度は終わりました。

◀写真2・分銅



◀写真3・棹秤



▶写真4・米さし



▶写真5・等級印



協力 郷土史の会